

翻 訳 の 誘 惑

—アジア系アメリカ作家紹介(1)—

杉 浦 悦 子

アジア系アメリカ人の文学

アジア系アメリカ人はマイノリティとしてアメリカの主流をなすメディアからは排除されてきた。19世紀前半から始まったアジア系のアメリカ移民の歴史は160年を越えているのだが、アジア系アメリカ人が描かれる場合は、その描き方はたいていが紋切型で、しかも謎めいた、よくわからない、そしてさらには油断ならない人物として十把一からげに描かれてきた。そこにはアジア系アメリカ人を余所者(外国人)、異国のエキゾティックな人、非アメリカ人とみなす欧米中心主義的な認識が読み取れるのである。

Shawn Wong は、*Asian American Literature : A Brief Introduction and Anthology* の序文で、アメリカにおけるアジア系移民の representation について書いている。

50年代のアジア系アメリカ人の子供であったぼくは、漫画、テレビ、映画などに描かれるステレオタイプなアジア人のイメージに囲まれていた。こういったメディアの中では、アジア人は釣り上がった目と長い爪をした敵として描かれていたし、その中には、角縁の眼鏡をかけた出っ歯の日本人の将官、卑屈な召使、太ってぶよぶよとした攻撃性のない警部チャーリー・チャン(まがいものの中国製格言をさかんにしゃべる)などがいた。これらの描出の仕方のなかでは、アジア人は現実の世界にはありえないような、どうしようもない程紋切型の台詞しかしゃべらなかった。事実、1970年にブルース・リーが登場して初めて、アジア系アメリカ人の少年がステレオタイプに反発し、まねしたいと憧れるモデル像をもつことができるようになったのである。リーはアジア系でない少年にとってもモデルとなっ

1)
た。

だが、排斥、差別を受け、「インヴィジブルなもの」であることを余儀なくされてきたアジア系アメリカ人の作家たちは、70年代に入ると、長い沈黙を破り、自分たちの言葉で語り始める。また、それまでに一世、二世たちが書いたまま、埋もれていた作品をつぎつぎと世に送り出す作業を始めるのである。1974年のアジア系作家のアンソロジー、*Aiiieeee! An Anthology of Asian American Writers* の出版は、アジア系アメリカ作家のルネッサンスの開幕を告げると同時に、多くの若い作家や研究家の輩出を促す引き金ともなったのである。

このような現象の背景にはアメリカそのものの変化があった。1965年の移民法の改正以後アメリカ社会におけるエスニック人口は増大し、それに伴い西欧中心主義的な文化への疑義が唱えられ、文化の多元性により寛容にならざるを得なくなった。現在、アメリカはアジア系アメリカ人の存在を抜きにして語ることはできないと言えるし、アジア系作家がアメリカ文学にどのような影響を与えるかは、今後目を離すことができないテーマである。

本論では、このような多元的なアメリカ文化を背景に、アジア系の作家の一人、Sigrid Nunez の作品 *A Feather on the Breath of God* (『神の息吹に吹かれる羽根』) を紹介し、移民の一人として、その母の言葉が英語でない者として、英語で書くことの意味を考察してみたい。

翻訳の言語

この本の語り手は大学の教授に、「あなたの書くものはヨーロッパの言葉を翻訳したものみたいな感じがしますね、²⁾ どうしてでしょう」と言われたと語る。語り手はニューヨークで生まれ、英語を第一の言語として育っている。にもかかわらず、(あるいは、であればこそ)彼女の言葉には、なにか外国語の要素、影がつきまとうのである。彼女は何を翻訳しているのだろうか。

翻訳、一つの言語からもう一つの言語への移し替え、一つの国から別の国への移動、越境、ボーダーの往還、そのとき、言葉から失われるものは何だろうか。また得られるものは? Amy Tan がエッセイ “Mother Tongue” で述べていることは、ボーダーランズで書く者の言葉を理解するうえでの手がかりとなるだろう。

わたしはともに育ったすべての英語 (all the Englishes) を使って書き始めた：第一にわたしが母に向かって使う英語、これはほかにもっと適切な言い方がないので「単純な英語」と呼ばれるかもしれない。第二に母がわたしと話すときに使う英語、これはほかにもっと適切な言い方がないので「ブロークンな英語」と呼ばれるかもしれない。第三に母の中国語をわたしが英訳したもの、これは明らかにもとの「風味が損なわれている」。最後にもし母が完全な英語を話すことができたなら、母が自分でしたのであろうわたしの想像上の母の中国語からの翻訳。母の内なる言葉。わたしはその本質を保つように努めた。その文法は英語でも中国語でもない³⁾。

Tan が'all the Englishes'というとき企てているのは、唯一の正しい英語、英語の王国の境界をずらし、そこに従来英語と考えられていなかった、「不完全でブロークンな」言葉を、つまり外国語的なものを混入し、それにも市民権を与えようということである。

そして、彼女があげる四種類の英語は、どれもある意味で翻訳の英語なのだが、その中でもことに四番目の英語は、まさしく理想の翻訳の言葉といえよう。オリジナルの言語にも移し替えられた新しい言語にも属さず、双方をあわせ持つ、ハイブリッドな言語、翻訳者が創造する言語である。それは一見「不完全でブロークン」という印象を与えるものも含んでいるかもしれない。だがそれは同時に、翻訳された新しい言語、この場合は英語を変容させる力を持つ、豊かな創造的な言語と言えよう。*A Feather on the Breath of God* は、中国系パナマ系アメリカ人を父親に、ドイツ系アメリカ人を母親に持つ語り手が、このような翻訳の言葉に目覚める物語として読むことができる。

できなかった翻訳

父親チャンについて語る第一章は、中国語を話す父親に驚かされた幼い日のエピソードから始まる。それは家族でピクニックに行った時のこと、チャンが偶然出会った中国人の知人と大声で話し始めたので、それまで中国語を話す父の姿を見たことのなかった家族は呆気にとられてしまう。そしてこのとき初めて語り手の少女は、父親が純粋なアメリカ人ではなくて、中国人(外国人)なのだということを悟るのである。

語り手が父の死後集めた断片的な情報によると、チャンは1911年にパナマのコロンに生まれている。父親は上海の商人、母親はパナマ人。生まれるとすぐに上海にいる父親のもう一人の妻のもとに送られ、10歳まで養育される。その後政情が不安なためパナマに送り返され、そこで母親の死を迎えたのち、12歳のときスローボートでアメリカに渡る。20年間アメリカに不法在留したのち、第二次世界大戦のとき、米国兵としてドイツに行く。そこで敗戦国の娘クリスタと知り合い結婚。アメリカに戻り、ニューヨークの公営住宅を借り、一家を構える。以後チャンは肺癌で倒れるまで実に懸命に働く。60歳で死亡。

おそらくチャンの中にアメリカナイズされたいという意志が生まれたのは、米国兵としてドイツに赴いたときからであろう。それまでは「中華街のチャン」として、その日暮らしをしていたチャンが、青い目とブロンドの髪、白い肌という、絵に描いたような西欧風の女性を妻にしてアメリカに戻ってからは、アメリカ的な家族を養うために、猛然と働きだす。英語しか話さない三人の娘、貧しいながらもアメリカ的な消費生活、テレビ、アイスクリーム、狭いながらもそれまでの宿なしの暮らしとは比べものにならない公営住宅。娘は「家には中国の物は一つもなかった…唯一の中国製はフンメルのパiano教則本、鳩時計、アルプスの風景画に囲まれて仏像のように座っているお父さんだけだった」と語っている。そしてたまに自分が働いている中華料理店に家族をつれて行くときは、「父はいつも、たいていの白人の客に出すアメリカ風にアレンジした (Americanized) 料理をわたしたちのために注文するように気を配った」(15)。チャンにとってアメリカ的な家族を持つことが、自分がアメリカナイズされる方法だったと推測されるのである。だが、チャンの英語は少しも上達しない。「わたしが生まれるまでに父は30年近くもアメリカにいたのに、父の話すのを聞くと、それが信じられなくなるだろう。父が英語をマスターできなかったのには、なにか父の意志のようなものが働いているように思えた」(4)妻の英語が上達すればするほど、チャンの英語は下手に見えてくる。そして、妻はチャンの「何」と「だれ」の言い間違いにいらだち、「誰、誰 (Who? Who?) って、あなたはなに？ 梟？」ととげとげしく言い返す。(13)。

次第にチャンは家で無口になってゆき、家族の団欒にも加わらなくなる。子供たちの英語の会話にはついてゆけないし、居間にあるテレビも理解できない。「たしかに父は次第にわたしたちに物を言わなくなった。父はどんどんわたしたちの暮らしの中から離れて行った」(20) 彼はアメリカ社会の中だけでなく、自

分が作り上げたアメリカ的な家族の中でも、異邦人として孤立を深めてゆくのである。娘は思う。「父がわたしたちに異邦人に見えたように、わたしたちも父の目には異邦人のように映っていたにちがいない。父にとってわたしたちはいつも『他人』だっただろう。女性。魔物。異国の魔物たち、アジア人はみんな同じにしか見えない異国の魔物たちと、中華料理といえばチャプスイのことだと思い込み、中国の習慣を笑い物にする異国の魔物たちと、少しも変わりなかっただろう。」(23)

チャンは国籍はアメリカにあるが、外国人である。アメリカのなかでチャンは最後まで「中華街のチャン」であり、誰からも理解されない、受け入れられない他者、外国人なのだ。チャンは誰にも理解してもらえない中国語でうわごとを言いながら、亡くなる。

父親の死後、娘は激しい後悔の念に襲われる。「毎晩父と二人きりだったときに、いろいろと聞いておけば良かった。そうすれば今答えのない疑問を持たずに生きてゆくということはなかったのに」(20)だが、母親は「あの人はなにごとによらずいつもあまり言うことがない人だったの。沈黙は金なりというわけ。文化的なものよ」(5)と説明する。妻の説明はチャンを沈黙の中に追いやるばかりでなく、ステレオタイプな「東洋人」のイメージの中に押し込んでしまうものである。これに対して娘は、コニーアイランドで活発に話していた父の姿、傷ついた雀に中国語で話しかけて母の冷笑を買った父の姿、最後に病院で中国語で何事か言いながら息を引き取った父のことを思いあわせ、父の沈黙の理由も考えるのである。そして、チェーホフの短篇「悲しみ」の老御者に言及し、「父は物を言わない人だったのではなく、誰にも耳を貸してもらえない人だったのではないだろうか」(22)と考える。

チャンの章は、父に耳を貸さないままに父を見送ってしまった娘の後悔を原点として書かれている。「もちろん父は自分のことを話すのを嫌がったかもしれない。けれどもわたしが忍耐強くすれば、話を聞き出せたかもしれない」(20)そして、父の言葉がたとえブロークンであっても、中国語であっても、声にならなくとも、アメリカ人として育てられた娘なら、それを翻訳することができたかもしれない。だが、チャンに関して、娘は翻訳の機会を逸している。「あなたがたご家族は、あの人が言っていることが知りたくてたまらなかったでしょうね」(27)父と同じ病室にいた人の言葉が娘の胸を刺すのは、父親に誰にもわからない「外国語」を話しながら死なせてしまったから、父親の翻訳

者になりえなかったからである。

母の言葉

チャンが娘たちに中国語を教えなかったように、クリスタもドイツ語を教えない。「ドイツ語はあなたたちの言葉ではないわ。必要ないわ。まず自分の言葉を覚えなさい」(35)というのが、クリスタの考えである。彼女は娘たちがアメリカ人であることを願っているのだ。

またクリスタは自分の言葉に翻訳不可能な部分があるとして、英語しか話さない娘に説明を拒んでいる。「ドイツ語の言葉には相当する単語が英語にはないものがあるわ。おかしいことだけど、大事な単語がそうなのね。とてもたくさんの意味のある言葉が。たとえば Weltschmerz, この言葉はなんて翻訳すればいいの。たとえドイツ語を勉強しても、こういう言葉は本当にはわからないの」(36) クリスタはチャンほど極端ではないが、違う形で自分の言葉、外国語に閉じこもってしまおうとしているのだ。だが、語り手はのちに「でもわたしはわかった。weltschmerz という言葉の意味がわかると思う」(36) と言う。娘は母親が説明できないとあきらめた母親の言葉を理解し、翻訳しようとしているのだ。

黙り込んでしまったチャンとは違い、クリスタはめきめきと英語が上達する。クリスタは「父とは正反対だった。しじゅうしゃべっていた」(39) クリスタの英語は公営住宅に住む近所の人などよりは文法的で正確なくらいで、むしろ“th”のかわりに“d”で間に合わせている人などを非難するほどだし、小学校の先生が副詞“well”を使うべきところを“good”と言ったというので、憤慨する。(34)

だが、クリスタの英語はやはり完璧とは言えない。ドイツ語特有の訛りはどうしても抜けないし、語法的な間違いも直らない。「あの人たちは一週間モーターに立っていた」(34)などと言ったり, especially と言うべきところを expecially と言ってしまったり, 自分の娘たちを“son of a bitch”と怒鳴りつけたりする。そしてクリスタは英語による読書量も多く、語彙も豊富であるが、やはりドイツ語に深い愛情を抱いているのである。

英語はすぐれた言葉よ。英語を使えば、だいたい行きたいところに行け

るわ。(言いたいことはたいてい言えるわ)でもドイツ語はもっと深みがあると思うの。詩により適した言葉。ずっとロマンティックな言葉。そうね、憧れを表すのに適しているのね。(36)

二つの言葉へのクリスタのこのような態度は、そのまま彼女の二つの国への態度を反映している。彼女はチャンに連れられて来たアメリカの生活に失望し、常にドイツに帰りたがっている。「母はよく言っていた。『家に帰りたい』」(54—55) クリスタにとって、「家」はあくまでもドイツなのだ。「母は決してドイツのことを『オールド・カントリー』とは呼ばなかった。母は『わたしの国』、『ドイツ』、あるいは『故国(ホーム)』と言った」(39) クリスタもまた国籍はアメリカであるにもかかわらず、意識の上ではアメリカに属していない。文化的にも、彼女はニューヨークの公営住宅という、いわばアメリカの真ん中にいながら、ドイツの文化を守っている。子供たちにはドイツ風の服を着せているし、クリスマスのような行事もドイツ風に行なう。

子供時代の母、母がいたところは、わたしやわたしの世界よりも上等だった。わたしはそう信じて疑わなかった。(「あなたたちアメリカ人が言う教育ったら!」「あなたたちアメリカ人が言うアイスクリームったら!」)(40)

クリスタにとって公営住宅は決して定住できる故国(ホーム)ではない。そこは仮の住まい、別のどこかに向かう旅の途上の仮の宿りにすぎない。「自分はこの公営住宅には属していないのだという確信：ことこのことに関しては、母は近所の人々と同じ考えだった。」(37) クリスタはいつも公営住宅から、そしてアメリカから出てゆくことを考えている。だから、クリスタはここでは孤独である。「母には親友はいなかった。娘たちが大きくなってからは友達になったが、それ以外は誰一人として本当に話ができる人はいなかった」(82) ホームを持たない人(ホームレス)という意味で、クリスタもまさしく難民に属すると言えよう。

だが、どこに行くというのか? クリスタはあれほど焦がれていたドイツに帰国したあと、そこももう自分の故国(ホーム)でないことに気付く。「…ドイツはもう故国ではないの。ほら、わたしが知っていたドイツはなくなってしまったの…もう旧世界のものはほとんど何も残っていないの。何もかも新しくなっ

てしまったわ…日毎にアメリカ風になっているの…それに知っていた人はほとんどよそに行ってしまったか、死んでしまったかなの」(83) 彼女は二つの国の間に立ち、両方の国に片足ずつ入れていたのだが、アメリカ側の足はどうしても根付かず、気が付くとドイツ側の足は根が抜けていたということになる。

このような二つの国の狭間で自分の場所を失った状態は、彼女の言葉の上にもあらわれている。クリスタはアメリカに来て数年後にドイツに戻ったとき、「自分がドイツ語を忘れていることに気付いた」。(83) アメリカに来てからの歳月がドイツで暮らした歳月の二倍の長さになると、クリスタがあれほど愛したドイツ語が、外国語になっているのである。しかも、英語はやはり外国語のままである。結局ドイツ生まれのクリスタがドイツ料理のレストランに入って英語で注文するという妙な仕儀になるのである。その英語には昔のままのきついドイツ訛りが残っており、語法の間違いも昔のままなのである。彼女は二つの国を失うのと平行して、二つの言葉を失ってしまうのだ。クリスタは二重にホームレスなのである。クリスタは言う。「いったいどうしてわたしはここに来たのかしら？」両手で頭を抱えたその様子はまるで「羽根みたいここに吹かれてきたかのようだった」。(72)

アメリカの中の外国人として亡くなったチャン、アメリカとドイツ、どちらにも所属せず、どちらにいても外国人となったクリスタ、この二人を父母に持ちながら、アメリカ人として育てられた語り手はしかし、母の物語を書くとき、自分の中の外国人に気付いている。彼女は「ときどき疲れたときとか度を失ったとき、酔ったときなど少し訛りのある話し方をする」(92) ことに気付いている。外国人を内に抱くアメリカ人である語り手は、この章の冒頭で述べたように、翻訳の誘惑に、母の言葉を新しい言語に翻訳したいという誘惑に目覚めているのだ。

アメリカ人になりたい

ニューヨーク市内のある地区の公営住宅にある現在の家を自分のホームと思うことのできないチャンとクリスタを両親として育った少女もまた、ここを自分のホームと思うことができない。少女はここを、どこか夢の国に行く途上の仮の宿、いつか抜け出して行くところと思っているのである。少女もまたホームレスであり、孤独である。12歳から16歳の間、少女が夢中になったバレエの

世界は、現実の世界を拒否する方法なのだ。

バレエの世界にあるものなにもかもが、現実の生活からの逃避を願っている少女に应えてくれた。ダンサーを包むこの世のものとは思えない、尼僧のような雰囲気。(98)

バレリーナの理想の体型に近付こうとして、少女は物を食べない。しまいには歯を磨こうとしただけで吐き気を催すまでになる。今日なら「拒食症」と言われることだろう。チャンが口から言葉を発しないことで、自分の周囲の外国を拒んだように、少女は口に物を入れることを拒む。つまり二人は経口による外界との接触を断つことで、現実の生活を拒否するのだ。

現実の世界を拒む少女は、バレエの世界のむこうに垣間見ることのできたもう一つの世界に、夢の国への入口を見いだしている。

なによりもバレエは逃避を意味していた。放課後まっすぐ家に帰らずに、わたしはバレエのレッスンに行くことができた。レッスンでは自分の臍に意識を集中することで、望みのない両親のことをすっかり忘れられた。それに市の中心街に行くのは心踊ることだった。わたしは中心街が好きだった。いつかそこを自分の定住の家(ホーム)にしようと心に誓った。(100—101)

少女の夢の国とは、ニューヨークの中心地である。そこは、バレエ教室で知合った裕福な家の少女ポーシャの住む世界、豊かなアメリカ人の家庭、アメリカの内部に安住する「アメリカ人のホーム」のあるところである。少女はそこに自分の「ホーム」を持つことに、外国人的な要素のない「アメリカ人」になることに憧れているのだ。「母は子供たちが純粋なドイツ人であれば良かったと思っていた。わたしはスー・ブラウンのような名前の本当のアメリカの女の子になりたかった」。(17) このことは、この本の最後の章「移民の恋」で語られることと合わせてみると、大変深い意味を帯びることになる。

翻訳の誘惑

「あなたはぼくのアメリカだ」(147) オデッサから移民してきたばかりのヴァディムは覚えたての英語で「わたし」にこう言う。語り手の少女は成長し、今では移民のための英語学校の教師をしている。その「わたし」がヴァディムには「アメリカ人」に思えるのだ。ドイツでチャンがアメリカ人に見えた約30年前のできごとが、アメリカの中心からの距離は相当に違ってはいるものの、今繰り返されるのだ。国境を越えたばかりでまだアメリカに定着したとは言えない状態のヴァディム、たった一部屋のアパートにはオデッサから連れてきたロシア語しか話さない妻をはじめ5人の家族がひしめき、その近所にもロシアからの移民が住んでいるというヴァディム、いわばまだアメリカの周辺に吹き寄せられてきたばかりの「外国人」ヴァディムの目には、「わたし」は国境から遥か離れたアメリカの中心部にいる「アメリカ人」に見えるのである。ヴァディムはずっと後になって「わたし」から聞かされるまで、彼女がアジア系であることに気付いていない。少女のときから、「アメリカ人」になりたいという夢を抱いていた「わたし」は、移民ヴァディムから「アメリカ人」と認めてもらったことになる。

ヴァディムの中では、英語を習得することとアメリカ定住に成功することとが、英語の先生を恋人として獲得することと分かちがたく結びついており、彼は最初の授業のときから、クラス一番の熱心な生徒になると同時に積極的に求愛しはじめる。そしてわずか三カ月もたたないうちにヴァディムは計画どおりタクシーの運転手としてニューヨーク市内を走り回れるほど英語を習得し、生活の安定の見通しもつける。そしてその短いあいだにヴァディムと「わたし」の「移民の恋」が始まり、終わる。

「わたし」が惹かれるのはヴァディムの言葉である。「わたし」は「わたしたちを引き寄せたのは、なによりもまず言葉だった。彼が話すのを聞くとわたしはいつでも心を動かされた」(164)と言う。移民の言葉、訛りの強い、ブロークンで単純な英語、それが、「わたし」の中の外国人に訴えるのだ。「わたし」の中に潜んでいた外国人が、ヴァディムの言葉によって目覚め、誘惑を覚えるのだ。アイロニカルなことであるが、ヴァディムのアメリカとして求められた「わたし」は、実はアメリカ人としてではなく外国人として彼に応えるのである。

彼の訛り、ブロークンな言い方、ゆっくりと英語を習得してゆく過程、こういったことすべてがわたしには大事だった。彼の進歩を見守ってられないこと、…自分の言いたいことがなんでも言えるようになったときそばにいられないことを、わたしは残念に思うだろう。(164)

そして、二人の言葉には翻訳という特徴が顕著に見られる。ヴァディムはいつも辞書を片手に電話をしてくる。

「マイ・ディア。『君を溺愛している』って言えるかい？これまちがってない？」『君を崇拝している』って言っても大丈夫？」「君にどう言えばいいか、辞書で探したんだよ」わたしの心臓がわたしから飛び出す。(147, 傍点筆者)

「わたし」が感動するのは、ヴァディムの翻訳の努力である。ロシア語から不完全な英語へと移動してきたヴァディムの内なる声が、その移動の途中での喪失、変化、ずれ、ぎこちなさにもかかわらず、アメリカ人であるはずの「わたし」の中に住む外国人に訴える力を持つのである。傍点の一文はヴァディムがロシア語の慣用句を英語に直訳したものである。

ヴァディムの語法の間違いを「わたし」は直す。「あなたはいつでも俺の言うことをわかってくれる。彼はいつもわたしにこう言う。あなたはいつでも俺の言うことをわかってくれる。やさしく、感謝をこめて。」(145)そして「わたし」はヴァディムが辞書で言葉を探すのを待ちながら「わたしには彼が言いたい言葉を見付ける前にわかる」と言う。(152)「わたし」はヴァディムの英語の教師というよりも、通訳者の立場に身をおいている。すなわち、「わたし」は一人の移民の翻訳者、そしてアメリカへの道案内、アメリカとの仲介者の役割をしているのである。「彼の英語はブロークンかもしれないが、わたしが一緒なら大丈夫」(145)

翻訳という意味で、“actually”という言葉にまつわるエピソードは興味深い。ヴァディムに“actually”という言葉の意味を尋ねられた「わたし」は、「説明はできないが、何回も聞いているうちにわかるようになる」と言う。(138)このやりとりは“weltschmerz”という言葉に関しての母親と「わたし」のやりとりを思い出させてくれる。母親が自分の母語の単語の翻訳をあきらめたのにな

いし、「わたし」は一応“actually”の説明を停止するのだが、彼がこの言葉を理解する可能性を否定するわけではない。「わたし」は不完全な直訳を避け、違った説明のしかたをすることによって、言葉の本当の意味へと方向を示すのだ。「わたし」が“weltschmerz”の意味がわかるようになるのと同様、やがて留守番電話に吹き込まれたヴァディムの“actually”の意味がわかったよ」という声を聞くのである。「わたし」のやり方もまた翻訳と言える。言葉にならない翻訳ではあるが、Amy Tan のめざす理想の翻訳の一つである。

そしてヴァディムが翻訳家を必要としなくなるとき、彼が「もう口籠もったり言葉を手探りしたりしなくてもよくなり、自分の言いたいことがなんでも言えるようになるとき」(164)、移民だったヴァディム自身が「アメリカ人」になるとき、「移民の恋」は終わる。後にヴァディムのことを振り返って「わたし」は「心を奪われた」と言っている。「わたし」はヴァディムという外国人の言葉に、そのたどたどしい翻訳に、そしてなかなずく彼のブロークンな言葉を翻訳したいという誘惑に心を奪われた。心を奪われたのは、ヴァディムの言葉に目覚めた彼女の中のもう一人の彼女、外国人である。ヴァディムから離れて2年後に偶然街でヴァディムのタクシーを止めてしまった「わたし」は、彼に自分も外国人であること、英語の教師として中国に行くつもりであることを告げる。アメリカ人として育てられ、アメリカ人になることを望んだ「わたし」は、英語と外国語、二つの言葉の境目の（あるいは接点の）不安定な位置に身を置き、そこで、どちらの言語にも属さない翻訳の言葉を探す旅人になることを選ぶのだ。

註

- 1) Shawn Wong (ed.) *Asian American Literature : A Brief Introduction and Anthology* (New York : Harper Collins Publishers, 1996), p.xiii
- 2) Sigrid Nunez, *A Feather on the Breath of God* (New York : Harper Collins Publishers, 1995), p.92. 以後この本からの引用の後の（ ）の数字は、頁数を表す。
- 3) Amy Tan, “Mother Tongue” in Garrett Hongo (ed.) *Under Western Eyes : Personal Essays from Asian America* (New York : Anchor Books / Doubleday, 1995) p.320.